

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

特 201 58  
106

既月羅公遠曰陛下莫要至月中否取拄杖  
擲之化為大橋色如銀行數十里精光奪月至大  
城闕公遠曰此月宮也仙女數百素練寬衣舞於  
廣庭曰此霓裳羽衣曲也帝密記其調遂回却顧  
其橋隨步而滅召伶官依聲作曲逸史言玄宗月

樂府

謠曲大講座

古今集と謠曲

金子元臣

據八月中八

至テ仙女ノ

始



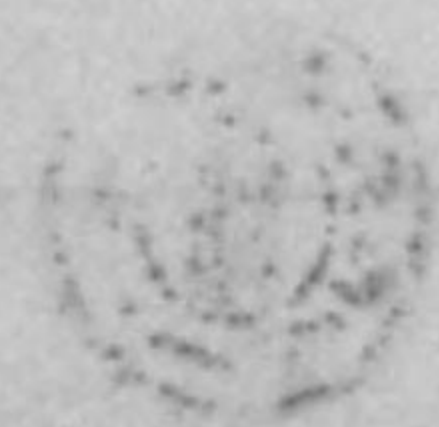


附261  
特106



古今集

金子元臣





# 謠曲と古今集

金子元臣稿

## 第一章

### 謠曲の出典

謠曲そのものも劇としての機構を形作る根本資料には、如何なるものが存在してゐるかといふに、その多くは古い物語物や假名歴史物や風土記や寺社の縁起や問巻の傳説やに便つて、各種各様の脚色と場面とを具へてゐる。而してその詞章方面から考察すると、歌物や謠曲や詩句の類が最も多量に剪裁して運用せられ、絢爛人目を眩せしむる偉觀を呈してゐる。その思想方面から觀察すると、そこに盛り上げられたるものは、殆どすべてが佛教思想に終始してゐるかのやうである。

試にそれらを引用せられたる書目を例舉してみよう。まづ歴史及び假名歴史物では

日本紀、古事記、舊事本紀、大鏡、増鏡、平家物語、源平盛衰記、太平記、曾我物語

の類があり、地理物では

日本風土記、丹後風土記、播磨風土記、攝津風土記、廻國雜記の類があり、物語物では

竹取物語、伊勢物語、源氏物語、狭衣物語の類があり、歌物では

古今集、拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集及び、代々の勅撰を數へ、又

萬葉集、古今六帖、夫木集等の私撰

堀川百首、六百番歌合等の蒐纂物

の類があり、歌書では

初心抄、袋草子、奥儀抄、袖中抄、無名抄

の類、謠物では

催馬樂、和漢朗詠集、新撰朗詠集、宴曲

の類、説話物では

今昔物語、大和物語、撰集抄、著聞集、江談、寶物集、本朝蒙求

の類、詩文では

本朝文粹、

以上は圖書に關するものであるが、漢籍としては、史書に

史記、漢書、列仙傳

の類、經書に

詩經、書經、禮記

の類、子類に

管子、莊子、列子、淮南子

の類、詩文に

文選、三體詩、白氏文集、百聯抄

の類を數へる。又佛書では

法華經、阿彌陀經、涅槃經、觀無量壽經、無量壽經、仁王經、淨土本緣經、不動經、十往生經、大般若經、心經、大

集經、往生要集、止觀、空觀、妙莊嚴王本事品、證道歌

の類、緣起物では

聖德太子傳曆、四度寺緣起、太子眞蹟本朝緣起、海藏寺開山傳、傳燈錄

の類、その他澤山ある。

以上の他詩人歌仙の家集に見えたものや、數多の辭典が全面に散布してゐるので、一々枚舉に耐へない。だが、私は今私に與へられた題目、「謡曲と古今」に就いて専ら語らねばならぬ。



第二章

古今集の概説

「古今和歌集」は醍醐天皇の延喜五年四月勅命によつて撰進せられたもので、これが勅撰歌集の嚆矢として、後來の二十代勅撰歌集を胚胎した偉大なる歌集である。

撰者は誰であつたか。それは大内記紀友則、御書所頭紀貫之、前甲斐少目九河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑の四人である。最高官の友則すら正六位上で昇殿も許れぬ身分、忠岑に至つては無位の舍人であつた。然し斯道には人爵の力は何の効力もない。この四人が當代傑出の歌仙たることは争はれぬ事實であつた。即ち勅命はこの人達に降下し、宮中の昭陽舍（梨壺）に召されて國歌撰進の事業に當らしめられたのである。友則は不幸撰集中に没したので、その以後は位次といひ手腕といひ申分のない族人たる貫之が、その多くを沙汰したものと考へられる。

而して萬葉集に洩れた奈良時代の作や、平安朝以降の古歌に寛平延喜兩朝にわたつた新人達の佳作を併せて集輯する方針のもとに選進されたのである。かく古今の作を網羅したといふ意味で本書の題名を「古今和歌集」と與へられ、卷數二十卷歌數千百首に及んだ。

この集は奈良朝時代及び平安初期の古歌が、その總量の過半を占めてゐる。見様によつては古歌の集積が集の中樞をなしてゐるといつてもよい。これ等の作中には萬葉集中の傑作と拮抗して、何等の遜色をも見せぬ神品佳作が、累々として

相次ぎ相倚つてゐる。

かく古調新調にわたつて金篇玉什を網羅したことは、この集が内容的にも、歴史的にも、絶大なる價値を以て評價され來つた所以である。

この集がかく最高權威ある勅撰集の嚆矢として歌壇に出現してから、從來傳襲された萬葉集も家々の打聞も私行してゐた選集も、盡く高閣に束ねらるゝ運命に陥つた。かくて國歌の正宗として、この集の威力は殆ど當時信仰の標的となつた法華經の如く、無二亦無三の絶對であつた。

この集以後の歌人は平安時代から近代に至るまで殆ど一千年間、ひたすらこの集に枕藉してその遺風を欽慕し、専ら軌範をこれに取ることに努力した。時に別派を立てなどして、特殊な變調を呈したこともあるが、遂にはこの集の一體又は分派たるにをはつて、この集を離れて歌はなく、歌としてこの集に淵源せぬものはなかつた。

なほ後世の勅撰歌集二十代集が、すべての模範をこの集に仰ぎ、又その題名を新古今、續古今、新續古今など襲用したこと、又この集の汗牛充棟であることなどは、この集が絶大な勢力をもつてゐたことを物語るものである。

殊にこの集が平安期の文學に與へた影響は、頗る甚大なるものであつた。その後も鎌倉、室町、江戸時代の文學を通じてこの集の歌から派生し岐出した片鱗殘甲を隨處に認めることが出来る。單に文學のみではない、藝術方面にまで進出した痕跡があつた。



### 第三章

#### 室町時代と古今集

平安時代は殊に諸道に於いて重代をおもんじ、師資相承の形式を重大視した。鎌倉時代を経て、室町時代に至つて、益々その傾向は甚しくなつた。

殊に歌道は五條三位俊成、京極黃門定家、中院禪門爲家の父子三代相承けて遂に和歌所の實權を握り、宗匠家としての地位を確保した。その末二條、毘沙門堂、冷泉三家に別れ、相争ふに至つて、各家傳の文書を恰も傳國の寶玉の如くに重寶秘藏し、定家手澤の古今集あれば、古今集の秘事は盡く傳へて我が家にのみあるが如く宣傳し誇耀した。井蛙抄に、龜山天皇の御前において二條爲世が定家筆の古今集を以て毘沙門堂爲家をとゞしたと、了俊不審に、二條爲明がおなじ古今集を懐に入れて方々を持ちあるき「我れこそたしかに傳へを得たれ」と揚言したことなどを見れば、蓋し思半ばに過ぎるものがあらう。

以上は鎌倉時代の出来事であるが、室町時代に入つては、傍流たる毘沙門堂家は夙く断絶し、二條の本系亦相次いで断絶し、冷泉の一家獨定家の血統を傳へ、別に飛鳥井家の一流が據頭して來た。就中二條家はその血統こそ断絶したが、その歌學の系統は當時の全歌壇を殆ど風靡する觀があつた。その初期には、桑門では頼阿、慶運、淨辨、愛好の四天王あり、綱貫では宗良親王、二條良基あり、有力な豪傑がつき／＼に輩出した。その中期には堯孝法印、後柏原院、一條兼

良、三條西實隆、冷泉持爲、同爲廣徹書記、飛鳥井雅縁、同雅世などを數ふべく、その他なほ武人には今川貞世、東常縁、太田道灌等を推すべく、連歌師にもその人また乏しからざる有様であつた。

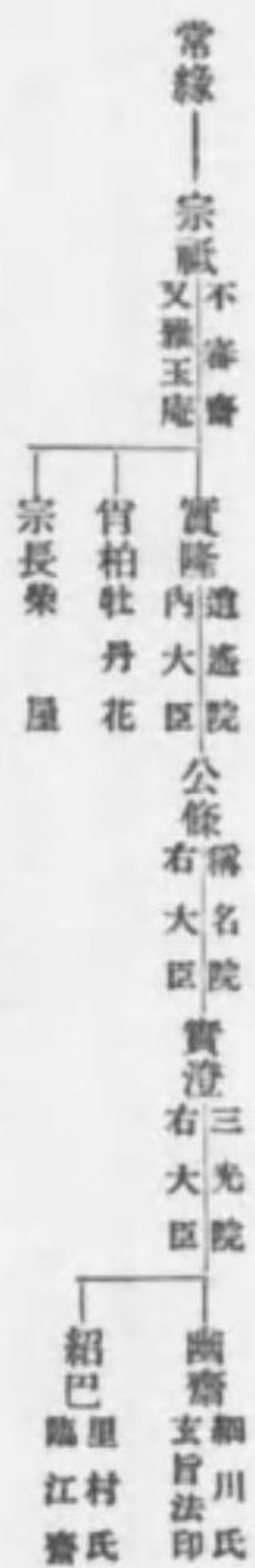
而してこれ等斯道の達人等は、皆先達の示教を嚴守し、おの／＼の家傳の口傳文書を授受するを以て、重大なる印可の如くに扱つた。しかもその授受されたる内容の多くは古今集に關する事柄であつた。即ち佛家の血脈相傳に倣つて、古今集秘事の傳授即ち古今傳授といふ事ははじまつた。北村季吟の八代集抄に、

古今集、この集は故金吾(藤原基俊)より五位三位(俊成)に傳授の故深く、京極黃門(定家)中院禪門(爲家)より世々の深秘口訣(二重三重に傳はれば不審齋(宗祇)牡丹老人(曾相)などその傳授の法とて十箇條の制詞をしるし殘されき、予そのかみ彌瑞院(清高法師)の御方より御傳授ありて、かの不審齋より九世の血脈をたまはれり。然れどもその師傳の抄はかの十ヶ條の制詞をもれて濫りにせむことは、住吉玉津島の冥慮恐れあり、云々。

とあるやうに、古今の傳授といふ事は大變な有難いものになつてしまつた。これはその始め、東野州常縁の打つた芝居であらうと、吉田令世はいつてゐる。向坂蘭溪の耳聞録、また和漢三才圖會にも、常縁を以て古今傳授の祖と擧げてある。

常縁は東山義政公院近の武士であるが、その祖先は坂東八平氏の隨一千葉介常胤の六男胤頼から出てゐる。代々和歌を嗜んで、武人の歌人として知られて來た。歌道を介して定家の子孫と姻戚關係を結び、二條家零落の時歌道の秘奥は悉く彼れの家に傳へたと主張し、しかのみならず、二條流の正統歌人で和歌所開闢をつとめた堯孝法印から、殊に古今の秘事を得たと稱し、これを連歌師不審齋宗祇に相傳したものが、いはゆる古今傳授の濫觴であつて、爾來





の如く、古今の秘事を口頭或は文書に依つて、師資相承傳授し來つた。

古今傳授の内容は如何なるものか。それは既に世間周知の事となつてゐる三島三木の傳をはじめとして澤山あつた。

謡曲の作者達が直接あるは間接に、古今集に對する知識を相承してゐた事は勿論であらう。それは文藝といへばすぐに歌道を聯想し、歌道といへばすぐに古今集を直覺する時代相であつたからである。

### 第四章

#### 謡曲と古今集

謡曲は室町時代に發生した至寶の文藝である。自分は今こゝにその發達の歴史に就いて語る自由を有しない。それは自分に課せられた當然の題目でないからである。故にまづこれだけの事を断つておく。

處で、室町時代は已に第三章に於いて略述した如く、古今集崇拜熱の最高潮期であつた。随つて古今集の幾多の文藝上に與へた影響は頗る強烈に偉大なるものであることが歴々として觀取せられる。さればこの新興の文藝たる謡曲といふ時代的作物が、何の影響も關係もなしに成立する所以がない。謡曲と古今集とが殆ど不可分解の關係を生じた理由も、こゝ

に領解せらるゝであらう。

謡曲は元來能劇の臺本である。芝居劇の脚本といつたやうなものである。随つて、その題材を各種の歴史に釋史に、話説など求むることは、固より至當の手段であるが、もしこれを歌集から求むるとしたら如何。必ず困難なる立場に置かるゝであらう。古今集は何といつても歌集である。苟も歌集である以上は、歌が主で、全篇悉く澤山なる名歌の集積であることが、その本色であるに相違あるまい。されば歌に就いての本事で謡曲の題材となり得さうなものは、さう／＼ある譯がない。僅に多少の詞書や左註に見えた二三の簡單なる小話がある位である。故に謡曲の内容實質に就いては、古今集はその關係が極めて稀薄である事は、争へない事實である。

然し、謡曲の詞章の上に就いては古今集の歌が或は歌詞が引用せられ或は剪裁して補綴せられた例は山の如く莫大で、殆ど枚擧に遑がない。古今集ほどこの點に於いて謡曲に深い關係をもつものは斷然他にないことを公言するに決して憚らない。

いざ次に章を易へて、實例を擧げて兩者の關係を説明することにしよう。

### 第五章

#### (一) 高砂

まづ「高砂」の曲に就いて話して見よう。



この曲は播磨の高砂の松の精たる尉と住吉の松の精たる姥とを出現せしめて、おの／＼その来由を説き、その松を歌道の譬喩に取つて君が代を奉祝するをその構想とした祝言物である。

これら精靈物を語るに就いて第一に述べて置かねばならぬ事は擬人物語の事である。草木鳥獸を擬人として大なり小なりの趣向に依つて物語を構成せしむることは、鎌倉期にその證據を認めることが出来る。即ち風葉集に見えた雀の物語、貝物語、四季物語の如きはそれであらうと考へられる。室町期の鶯鳥合戦物語の如き、勿論それである。心理の動向から考へると、この擬人物語の一轉が精靈物であらうと思はれる。謡曲では人間や鳥獸の幽靈が出て來ては坊さんに出會つて佛法の濟度に浮びあがる趣向の物が多いが、植物の精靈が奇特を現する類も亦可なりある。即ち梅の精(梅)櫻の精(墨染櫻、西行)櫻花の精(半菝)白菊の精、草花の精(花軍)楓の精(六浦)藤の精(藤)芭蕉の精(芭蕉)杜若の精靈(杜若)柳の精(遊行柳)及びこの高砂の松の精などを數へることが出来る。

松の精が人間化した話説は支那にもその例がある。宋の張舜民が南遷録にいはく、

岳陽樓に碑あり、極めて大なり。乃ち前知州李觀の記すところ、呂洞賓の事迹といふ。呂、岳州白鶴寺の前に憩ふ。

松下老人あり、松梢より冉冉として下り、恭を呂に致す。これに問ふ何ぞと。乃ちいはく「某は松の精なり、先生の過ぐるを見、禮として當に候見すべし」と。呂因つて二絶句を寺門の壁間に書す。其の一にいふ、「獨自行兮獨自坐、無限世人不識我。惟有城南老樹精。分明知道神仙過。」今郡人松下に於いて亭を創め、名けて呂仙といふ。

と。燕居雜談には高砂の曲は或はこの松の精を希羅二人に取成して作れるものかともいつてゐる。時代から見れば呂洞賓の時代の方が古いから、さうもいはれようが、然しこれは和漢偶合の話説と見てもあな勝わるい事はあるまい。

さてこの曲は古今集に重大な關係をもつてゐる。まづ第一に曲の本文に、

「高砂住の江の松に相生の名あり當所と住吉とは國をへだてたるに何とて相生の松とは申し候ぞ。仰せの如く古今の序に高砂住の江の松も相生のやうに覺えとあり。……」

と出てゐるのは、古今集の序中

高砂住の江の松も相おいのやうに覺え……

を本據としたもので、これは集中の歌に、

誰れをかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに(雜)

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく代經ぬらむ(同上)

など見え、高砂も住吉(住の江のこと)も其處の松の老齢である事を本據として、序文には相おい(又相おひ)のやうに覺えといったものである。相おいは相生の義と見る説もあるが、相老の義も一説として當時立派に存してゐた。この相生、相老の二義から聯想を逞しうして、高砂の松と住吉の松とを老夫婦と見成し、更にその精靈を點出して一曲の主役を動めさせた。

この主役の動むる役目は何かといふに、歌道を借りて君が代を祝ふにある。古今の序文のもつ命意の歸着點もやはり其處にある。詞章としては前述の歌二首がそのまゝに全首を採録せられたるのみならず、又

「言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、生きとし生けるもの毎に、敷島の蔭によるとかや。」  
は古今の序文の



大和歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。花に鳴く鶯水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける。  
より出で、

「松の葉の散り失せずして色は尙、正木のかづら長き世の賢なりける常磐木の」  
はおなじ序文の

松の葉の散り失せずして、正木のかづら長く傳はり……。  
を踐んだものである。

(二) 難波

難波の曲は古今集の序に、

(イ)「その六種のひとつには添歌」

「大さゝきのみかどを添へ奉れる歌、

難波津にさくやこの花冬ごもりいまを春べと咲くやこの花  
といへるなるべし。」(序註)

(ロ)「難波津の歌はみかどのおほんはじめなり。」

「大さゝきのみかどの、難波津にて皇子と聞えける時、東宮を互に譲りて位に即き給はで三年になりにければ、王

仁といふ人のいぶかり思ひて詠みて奉りける歌なり。この花は梅の花をいふなるべし。」(序註)  
など見えた序註を本據として、王仁の事迹及びその難波津の歌に依つて、君が代を奉祝した祝言物である。  
詞章としては、

「君が代の長柄の橋もつくるなり。難波の春も幾久し、雪にも梅の冬籠り、今は春べのけしきかな。」

は前掲の王仁の歌、及び集中、誹諧歌の

難波なる長柄の橋もつくるなり今はわがを何にたとへむ(難。伊勢。)

に據り、

「六義の始めの添歌にも、難波の梅こそ詠まれたれ。」

は前掲の(イ)に據つて書かれ、

「抑も難波津の歌は帝の御始め、又淺香山の詞は采女の土器取りくなり。」

は前掲の(ロ)及び集序の一節に、

淺香山の言の葉は采女のたはぶれより詠みて……。

葛城王をみちのおくへ遣はしたりける時に、國の司事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりて詠めるなり。これにぞ王の心解けにける。(序註)

とあるに據り、  
「わたつみの濱の眞砂を敷へつゝ、……。」



「然れば音きみ心のいつくしみ深くして、八州の外まで波もなく、廣き御惠筑波山の陰よりも茂き御影は、大君の國なれば、……。」

は集序の

濱の眞砂の數積りぬれば、……。

冷きおほんうつくしみの波八洲の外まで流れ、廣きおほん恵の蔭筑波山の麓よりも繁くおはしまして……………。

におのゝく據つてゐる。又

「梅が枝に来ゐる鶯春かけて鳴けども雪は、ふるき鼓の……。」

は集の春歌

梅が枝に来ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつゝ(作者未詳)

に本づき、

「春日野に若菜摘みつゝよづろ代を祝ふなる心ぞしるき」

は集の賀歌の

春日野に若菜摘みつゝよづろ代を祝ふ心は神ぞしるらむ(素性)

に據つたものであることは明らかである。」

(三) 龍 田

この謡は龍田神の由来と神徳を述ぶるが主であるが、龍田川と紅葉の關係が強調して作られてある。これは古今集秋歌下に

龍田川もみち亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ(作者未詳)

この歌は、ある人、奈良のみかどの御歌なりとなむ申す(左註)

とあるを典據としたもので、前半は紅葉の中絶を盛に反復し、なほ秋歌及び冬歌の

立田川にしき織りかく神無月時雨のあめをたてぬきにして(作者未詳)

年ごとにもみち葉流る立田川みなとや秋のとまりなるらむ(作者未詳)

を借りて詞章を潤飾し、又壽旅歌の

この度は幣もとりあへず手向山もみちの錦神のまにゝ(菅家)

が断章的に裁取せられてある。

(四) 飛 鳥 川

飛鳥川の謡は、集の雜歌

世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる(作者未詳)



にその題名を取り、内容は母の行方を尋ねて飛鳥の里にめぐり逢ふ事を作つたものである。只本文に、

「飛鳥川ぞ知ろしめして、昨日の淵は今日の淵に替ると、かねて知ろしめさぬは、御心なき仰せかな。」

「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の淵になるや、夜の間の五月雨に、……。」

などが古今集に交渉をもつてゐる。又夏歌及び戀歌、及び詩讀歌の

五月雨に物おもひをれば時雨夜深く鳴きていづち行くらむ（紀友則）

五月山積をたかみ時鳥鳴く音空なる戀もするかな（紀貫之）

幾はくの田を作ればか時雨しでの田長を朝な／＼呼ぶ（藤原敏行）

（五） 關 町 小 町

名月や湖水にうかぶ七小町、小町ぐらむ古來問題になつた婦人は尠からう。それが果して美人であつたかどうかはわかぬが、玉造小町壯衰書以降、いろ／＼な話説が構成せられて、人の口の端はなか／＼うるさい。

朝に紅顔夕に白骨、かく高唱するは、美女に對する呪咀であり、一面には色欲煩惱を斷離する建勲ではなくて、厭離せしむる佛者の方便であらう。然し、いかに國色の名花も風雨に摧殘せられる機会が、目前にある事は争はれぬ人世である。

小町の實傳を委しくは傳はらない。氏が小野である事は勿論だが、出羽の郡司の女などいふ小野氏系圖の説も確證はない。古今集及び後撰集に小町が姉、小町が孫など見えてゐる。又小野貞樹と詠みかはした歌が古今集にある。これは同族

の親屬であらう。文屋康秀、安倍清行、僧正遍昭なども詠みかはした歌がある。入戀の間柄だつたらしい。これ等交遊の人々の時代から推考して見ると、文徳清和の頃に生存してゐたらしい。とにかく平安期における女流歌人の第一者として名聲を逞しうし、紀貫之は六歌仙の一人に推選して、歌のさまを知れる人と許可した。

美人に附物の戀愛遊戯の葛藤は、敢へて人後に落つるものではなかつたらう。が、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに（春歌上）

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり（戀歌五）

私かぜに逢ふたのみこそ悲しけれわが身空しくなりぬと思へば（同上）

などの數首、並に後掲の「色見えて移ろふものは云々」及び「わびぬれば身をうき草の云々」の詠を撮合して、流石の佳人小町も、その色衰へては情人にも見限られ、老後は遂に零落の極行き倒れになつたやうに、傳説が構成せられた。關寺

小町、又卒兜婆小町、草紙洗小町等は皆この古今集所見の材料を根本とし、準據とし或は假説し利用して作られてゐる。さてこの關寺小町は集序の六歌仙を批評した詞に、

をのゝ小町はいにしへの衣通姫のながれなり。あはれなるやうにて強からず。いはゞ、よき女の惱めるところあるに似たり。強からぬは、をうなの歌なればなるべし。

（思ひつゝねればや人の見えつらむ夢と知りせば醒めざらましを）、「色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」、「わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」、そとほり姫の歌「わがせ子が來べきよひなりさゝがにの蛛のふるまひかねてしるしも」（序註）



などあるものを本據として、小町の歌道の名手たる事を反復推尊し、

「わがせこが来べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも、是も女の歌候か。」

「是は古へ衣通姫の御歌なり。衣通姫とは元祇天皇の后にてまします。形の如く我等も其流をこそ學び候へ。さては衣通姫の流を學び給ふかや。近年聞えたる小野の小町こそ衣通姫の流とは承れ。」

「あはれなるやうにて強からず、強からぬは女の歌なれば、いとゞしく老の身の弱り行く果ぞ悲しき。」

など作られ、又

思ひつゝぬればや人の見をつらむ夢と知りせば覺めざらましを（戀歌二）

下つ出雲寺に人の業しける日、眞淨法師の導師にていへりける詞を歌に詠みて、小町が許へ遣しける。安倍清行

包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目のなみだなりけり（同上）

色見えて移るふものは世の中の人このころの花にぞありける（戀歌五）

文屋康秀が三河の丞になりて、難見にはえ出で立たじやといひ遣れりける返し、

わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ（雜歌下）

などの歌に據つて

「文屋の康秀が参河の守になりて下りし時、田舎にて心をも慰めよかしと、我を誘ひし程に讀みし歌なり。」

「色見えてこそ讀みしものを、うつろふ物は世の中の人このころの花や見ゆる、恥かしや、わびぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらば今もいなむとぞ思ふ、恥かしや。わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思

よ。」

「實にや包めども袖に溜らぬ白玉は、人を見ぬ目の涙の雨。」

とつらね、

「埋木の人知れぬ事となり、花すゝき穂に出だすべきにしもあらず。心を種として、言葉の花色香に染まば。——やさしくも幼き人の御心に好き給ふかな。まづ／＼廻く人の歌び候ふは、難波津の歌を以て手習ふ人の始めにもすべき山

聞え候ふよのう。それ歌は神代より始まれども、文字の數定まらずして、事の心わき難かりけらし。今人の世となりて、めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて、難波津の歌を歌び候ふ。又淺香山の歌は玉の御心を和らげし故

に、これ亦めでたき詠歌よのう。——この二歌を父母として手習ふ人の始めとなりて、云々。」

「さゝ波や濱の眞砂は盡くるとも、讀む言の葉はよも盡きじ。青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せぬ、種は心と思し召せ。たとひ時移り事去るとも、この歌の文字あらば、鳥の迹も盡きせじや。」

は集序の文を全く歩襲し撮合したもので、その剪裁の手腕の滑達自在なるを見るべきである。

又本文に「わびぬれば」の歌を擧げて、その次に

「これは大江の惟章が心變りせし程に、世の中物うかりしに、文屋康秀が三河の守になりて云々。」

とある。小町と惟章との關係を書いたものは古書にない。只古今集の飛鳥井榮雅の抄に出でゐる。かく古今集の末書たる註釋物に見えた材料をすらすら、出典として採用する、いかに古今集の本書が室町時代に絶大なる勢力を有ち、詩曲の上に多大な影響を齎したかと領會せらるることであらう。



要するに幾多の謡曲中、高砂とこの關寺小町とが、最も切實に古今集の本文に準據し、最も多量にその詞章を剪裁してゐることを發見する。

以上擧げた高砂、難波、龍田、飛鳥川、關寺小町の外、小鹽の如き杜若の如きも古今集に大關係はあるが、これらは寧ろ切りに伊勢物語を出典したと見て、それに譲る方が至當と思はれるから、こゝには略いた。三輪は集の雜下の「わが庵は三輪の山本戀しくは」の歌が引用せられてあるが、曲全體の上からは餘り重要性が無いから、これも失敬する事にした。

### 第六章

#### 結論

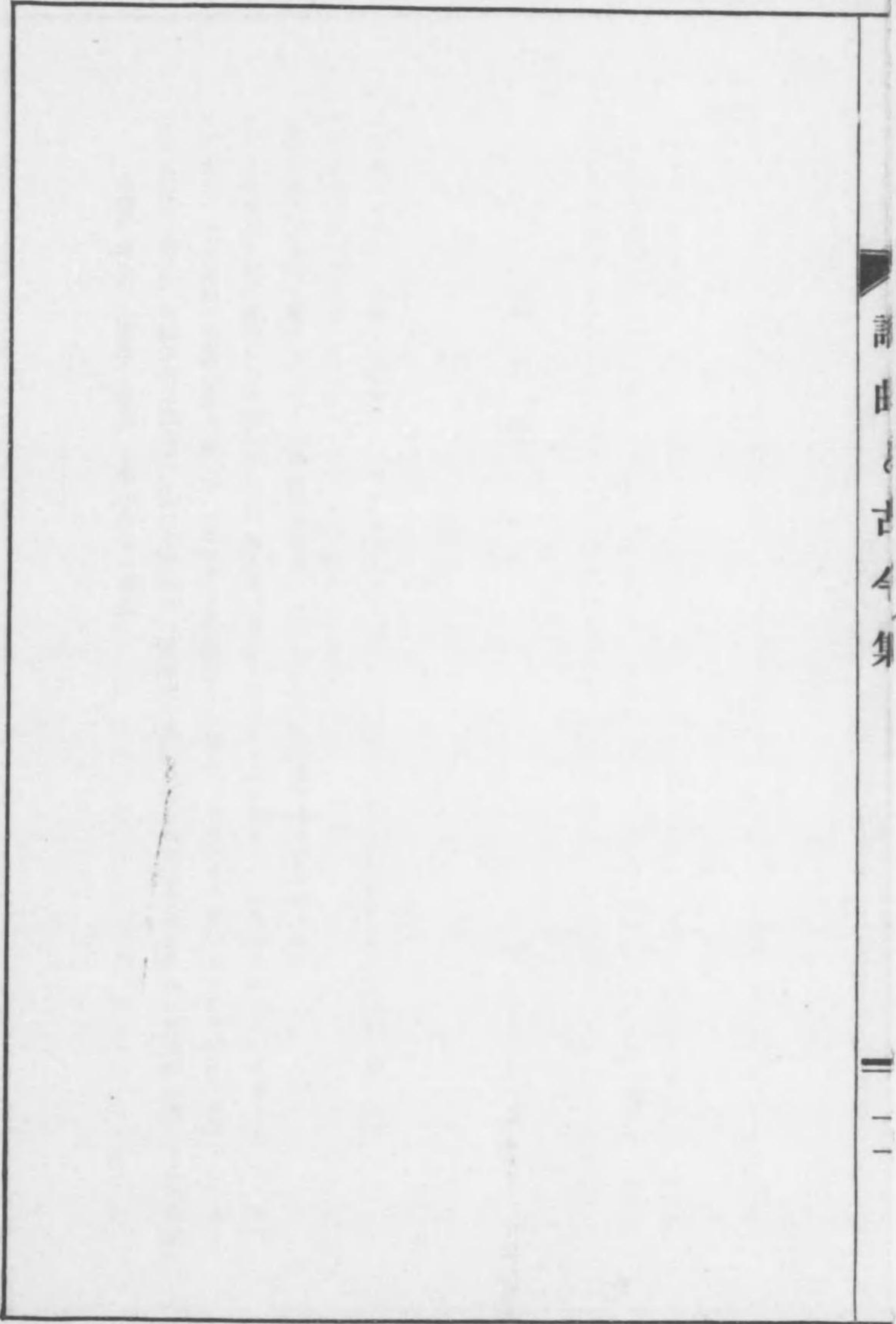
詞章のみに就いて謡曲を検索すると、實にまた古今集の序文及び歌を、斷章的に應用した痕跡が頗る著しい。試にさし當つた左の四十曲に就いて、古今集應用の迹を點檢すると、

- 小鹽——七箇處
- 小督、東北、求塚——四箇處
- 紅葉狩、卒都婆小町、俊寛、花篋、班女——三箇處
- 千手、老松、大原御幸、江口、西王母、放下僧、弱法師、遊行、右近、白樂天、松風——二箇處
- 朝長、海士、安宅、杜若、忠度、隅田川、葛城、雲輪、嵐山、安達原、攝待、玉葛、小袖曾我、鞍馬天狗、僧

野、羽衣、土蜘蛛、室君、楊貴妃——一箇處

といふ成績を得た。勿論これは概算で、委しく取調べたならば、尙更多量にのぼるであらうが、僅か四十曲ですら斯の如くである。況や内外二百番全部に亘つて、綿々密々に穿鑿をした時は、餘りにその量の莫大なる結果に驚倒するであらう。この點に於いては到底他の引書などは、古今集の足もとに及ぶものではない。時代の好尚とはいひながら、又一面には古今集そのもの、眞價が、かうした結果を來らしめたと見るのが至當であらうと考へる。





昭和九年七月五日印刷  
 昭和九年七月十日發行  
 編輯者 齋藤芳之助  
 發行者 齋藤芳之助  
 印刷者 鈴木芳太郎  
 東京市赤坂區新町五丁目卅四番地  
 能樂書院內  
 發行所 講曲大講座刊行會  
 振替東京四三八九番  
 電話青山六九七四番

禁轉載

不許複製



佛成道之玉七之處寂滅道場トハ各タリ今佛心寺十  
ルカ故寂滅道場モ此處ナリト見カケタル心十ルヘニ  
野分ノカセ 暴風 秋七八月二一度吹大風也

台林刊行

葛木明神モ男躰也コシモ謡ニツクリ申ハ女躰ノヤウ  
ニカキ申歟

一躰分身 形ハ一二ニテ身ヲイカホトモワカツコト也

台林刊行

終